

メディアウォッチング例会（2019年2月）

第47回 2019年2月27日（水）

ゲスト 阿武野勝彦 東海テレビ報道局プロデューサー

テーマ 異色のドキュメンタリー

「さよならテレビ」放送の反響

主な内容

- ◎数多くの受賞歴持つ阿武野プロデューサーが語る
- ◎「さよならテレビ」は東海テレビの“ニュース現場”が取材対象
- ◎なぜ放送できたか 報道の舞台裏を記録した異色の番組
- ◎企画は「ヤクザと憲法」を制作した土方ディレクター
- ◎第一稿（粗編集）の映像を見て スタッフが泣く
- ◎分かりやすさが最上級のテレビ表現ではない
- ◎番組の軸に“派遣スタッフと社員”の問題
- ◎なぜ“さよなら”なのか 開局60年 ゼロに戻って「テレビ」について再考
- ◎番組見た二人の元社長 “いいんじゃないか” “恥ずかしいと思う必要ない”

司会 時間になりましたので、47回例会を始めます。

司会の出野さんの都合がつかず、今回は急きょ私が進行役を務めます。

今日のゲスト阿武野勝彦さんのことは皆さんご存知だと思いますが、とりあえず、今、大変評判になっている「さよならテレビ」というドキュメンタリー番組(77分)をご覧くださいそれから阿武野さんにじっくり話を伺いたいと思っております。阿武野さんは、1981年に東海テレビにアナウンサーとして入社の際、記者、営業局業務部長などを経て、現在、報道局のプロデューサーです。

2011年からはご自身で制作なさった(テレビ)ドキュメンタリーの映画化(映画館で上映)ということをされています。すでに11本の映画を作っておられて、私も何か拝見しました。例えば「人生フルーツ」は大阪では大阪・十三の第七藝術劇場(七藝)で上映されたんですが、いつもガラガラの七藝が、「人生フルーツ」のときは超満員になるということがありました。

「注」 「人生フルーツ」(91分)

プロデューサー 阿武野勝彦

監督 伏原健之

ナレーション 樹木希林

現在も全国の劇場でアンコール上映。

主人公は建築家津端修一さん(90歳)と妻の英子さん(87歳)。

愛知県春日井市、雑木林の中にたたずむモダンな平屋が舞台。

「長年連れ添ったふたりの暮らしから、この国が、ある時代に諦めてしまった本当の豊かさへの深い思索が始まる」

と作品解説は結ぶ。

阿武野さんは優れた作品に贈られる文化庁芸術作品賞、菊池寛賞、放送文化基金の個人賞、芸術選奨文部科学大臣賞、日本記者クラブ賞など、数多くの受賞歴をお持ちです。そういう阿武野さんです。ちょっとひと言お願いします。

<数多くの受賞歴持つ阿武野プロデューサーが語る>

阿武野プロデューサー

皆さん こんにちは 阿武野です。よろしくお願ひします。

大先輩ばかりの中で「さよならテレビ」というドキュメンタリーを上映して大阪から帰れるのかなと(笑い)。「テレビって そんなんじゃないよ」という風なことになるんじゃないかと心配しています。

あらかじめ、お話しておきますが、私も今年の1月末で自由契約になりました。還

暦を迎えて、東海テレビでは社友会への所属ということで、気持ちは半分そちら側（OB・OGの面々が座る客席に向かって）の感じでございます。

これまで大体、年間3本か4本ぐらいドキュメンタリーの面倒を見ているのですが、この「さよならテレビ」というのは去年(2018年)9月2日に放送して(いろいろな反響があり)今も会社の中では居づらい感じがあります。でもちょっと冷たい雰囲気の中でも皆さんに見ていただいて、その反響をまた社内にお返していこうかなと思っています。

「さよならテレビ」の放送の一週間前ぐらいに番組を宣伝する「番宣」を放送しました。15秒と30秒のスポットですが、「テレビよ、これは君へのラブレター」というコメントをつけてサザンオールスターズの「TSUNAMI」という曲をバックに流しました。

「TSUNAMI」は、放送界ではおそらく東日本大震災以降どこも使っていませんが、自主規制だと思います。番宣に「TSUNAMI」という曲がいいと思ったのは、夏にサザンオールスターズが新しいCDを出して、その中の一曲目が「TSUNAMI」だったんですね。ああ、桑田佳祐さんとサザンオールスターズは、「TSUNAMI」という曲に対して、こういう気持ちでいるのだなという風にうけとって、それが「さよならテレビ」というイメージと非常に重なった。特に「さよならテレビ」に出てくる福島君というアナウンサーの心象風景にぴったり合うので、彼のナレーションで「テレビよ、これは君へのラブレター」という番組宣伝のキャッチコピーを流し、放送を盛り上げたんです。ところが土曜、日曜日の夕方に放送したものの、(視聴率は)2%台というさんざんな結果でした。

しかし不思議なことに、放送後の反響が大きくて、新聞、雑誌 インターネット系ではすごい勢いで書き立てられました。ローカル番組がなぜ注目を集めているのか、皆さんがそれぞれ過ごしてきたテレビマン人生の中で、この「さよならテレビ」はどのような風に見えるのかということ、後ほどお聞かせいただければと思っています。77分ですが、ナレーションはいつさいありません。ちょっと音楽が流れる程度で、あとは現場音で構築しております(文字表記も少し)。

笑える場所は、もう思いっきり笑ってください。ユーモアは忘れずに、というのがドキュメンタリーの基本だと思っています。

<「さよならテレビ」は東海テレビの“ニュース現場”が取材対象>

「さよならテレビ」(77分) 上映

2018年9月2日 放送

映像 文字表記「東海テレビ・報道部」フロア

<番組の導入部>

音声 (編集長)

「お疲れさまでした。

昨日に引き続き当日ネタ、たくさんあるなか、
ご対応いただきお疲れさまでした。」

(このあと土方ディレクターが報道部員に向かって)

「ニュースが終わったところで、まだお時間を
いただいてごめんなさい。今お手許にドキュメンタリー
の企画書(「さよならテレビ」)をお渡ししているかと思
います。えっとテーマはテレビです。それで取材対象
はこのテレビ局になります。まあメディア、特に今、テ
レビが“マスゴミ”と言ってたたかれているんだけど、
実際、じゃあ、今メディアってどうなっているのかと
いうのが、大まかに言うと企画の趣旨です。
普段撮るほうの皆さんなので、撮られることにちょっ
と慣れないかもしれませんが。-----」

ドキュメンタリーのディレクター土方氏が企画書の
説明を行っているとき、カメラはすでに自局の報道
部内を映し出している。

ところが編集長やニュースデスクから、ディレクタ
ーの取材協力をお願いにクレームが出る。

“いきなり言われても”“カメラが気になって仕事に
ならない”と。

結局、カメラが回っていないところで、取材、撮影の
条件を話し合う。そして

△マイクは机に置かない

△ニュースの取材、編集を指揮する会議

「デスク会」は撮影許可を取る

△放送前に試写を行う

などいくつかの約束を交わした上で、1年7か月に及
ぶ長期取材が始まることになる。

東海テレビのニュースを制作する報道現場の日常が
カメラに記録されていく。

特にカメラの焦点はデスクを中心とした報道の幹部と三人のスタッフに絞られる。

△ワイドニュース「みんなのニュース ONE」の

キャスター・入社 16 年目

△記者歴 25 年目 契約社員 (49 歳)

△記者歴 2 年目 制作会社からの派遣社員 (24 歳)

「さよならテレビ」のスタッフが報道現場に密着し、テレビニュースを制作していく過程を克明に追跡していくなかで、人名の文字の誤表記、撮影時に起きる肖像権の問題、さらには政治的な問題、例えば「共謀罪」か「テロ等準備罪」など局の報道姿勢を問われる複雑テーマにもぶつかる。

番組では報道局員の時間外労働（働き方改革）、契約社員の問題など今のテレビ局が抱える複雑でデリケートな事象にも、真正面から向き合い、記録していく。印象に残るシーンがある。画面は社内の薄暗い廊下。派遣社員の新人記者が「3 月末で契約が終わることになった」と先輩に語りかける。それを聞いた記者歴 25 年の契約社員は「何か泣けるような話だな」とつぶやく。カメラはちょっと距離をおいて、この二人の後ろ姿のルーズなショットでフォローしていく。対象となる人物の背を凝視する構図は番組中、随所に見られ、ドキュメンタリーとしてのリアリティーを追求していくうえで極めて効果的なシーンとなっている。「さよならテレビ」は放送後、新聞、雑誌、インターネット系で取り上げられ、大きな反響を呼んだ。毎日新聞は、「TV 局が自ら描く報道現場の舞台裏」という大きな見出しでオピニオンのページで紹介した (2018.11. 5 朝刊)。

同紙面で水島宏明・上智大教授は「この番組は局として聞かれたくないことも含め、すべてをリアルに描いている。かつてない番組であるといつてよい。制作会社から記者の派遣を受けることでコストを下げる場面は、テレビ制作の構造が象徴的に描かれている」と評価している。

<質疑に入る>

司会 今日皆さんからご質問をいただいで進めていきたいと思ひます。今ご覧になつた作品についてのご質問なり、ご意見なりをおっしゃってください。

<なぜ放送できたか 報道の舞台裏を記録した異色の番組>

出席者 なぜ放送できたのか、よく上司が許可したなと思ひました。

阿武野プロデューサー

大変、微妙なことを言わなければならないのですが、なぜ放送できたのかというところ、（私たち東海テレビのスタッフが）ドキュメンタリーを作っている現場に対して、会社からの絶対的な信頼があるということになると思ひます。

反響としては、視聴された地域（愛知・岐阜・三重）の人たちがネットにあげるとか、会社にかかってくる電話やメールだけでも 150 通ぐらいありました。その中には結構、長文のものもあって、理解を深めてくれていることが分かる。とんでもないといった否定的なものは、ほとんどありませんでした。

というのは恐らく、東海テレビのドキュメンタリーは、こういうものなんだと思ってくれる関係者が地域の中で、この 10 年ぐらいの間に醸成されてきたんだろうなと、勝手に思っているんですが、それとは対照的に社内では「局のイメージを悪くした」など批判の声があがりました。

そこで、「さよならテレビ」の制作に関わったスタッフを始め、編成局、コンプライアンス推進局、事業局など役員、社員、外部スタッフが集まって（約 80 人）ティーチインを開きました。（立場の異なる）いろいろなセクションの人たちが発言し、（ドキュメンタリーの制作を巡って）事実とは何か、表現とは何かといった議論にまで発展しました。

私はその席で、テレビの将来について、つま先を見てモノを語るのではなく、視座をもっと遠くに据えて論議しようじゃないかと言ひました。

このことも含めて、今のテレビに対する危機感について、「さよならテレビ」という番組はリトマス試験紙なんだという風に思ひ始めるのです。

再放送の要望はたくさん来ていますが、現実には再放送されていないし、その予定もありません。

次に、なぜこの番組を作ったかということについてお話しします。10 年ぐらい前に「テレビはこのままでいいのかな」と思ひたんですが、ずっと何もできないままでいました。このままではいけないと思ひて、三つほど自分なりに秘めたる課題を持ちました。それは、お世話になった東海テレビに恩返ししようというのの一つ。

もう一つはドキュメンタリーに恩返ししたい。三つ目がテレビ界の発展のために恩返ししたい、この三つのことを自分の軸にして、仕事をコツコツやり始めました。ある意味、三つの課題全てに対する恩返しなのですが、一番とがった形で表したのが、この「さよならテレビ」の制作になりました。

本音のところは、やっぱりテレビはこのままでいいのかということなんです。最初にご紹介いただきましたが、私は1990年代後半から2000年初めにかけて、3年ほど営業局の業務部長をやっていました。業務部というのは営業の司令塔で、お金の出し入れからスポンサー、代理店の動きまで社内調整をするのが仕事でした。お金の動きから会社を見るという部署に就けたせいで、常に数字を見ると、ああこういう傾向が出て来ているんだなということが分かってしまうんですね。私が業務部長を担当しているときに掲げた目標は一日一億円で、売り上げはそれに近い数字になっていきました。しかし、この10年で売り上げは20%近く落ちているんです。

そういう時代に民間放送（民放）は入ってきているということなんです、関西局はどうですか。（出席者から）「いっしょです」の声。

この前、長崎、福岡に行くと、20%以上ダウンしているところもあるということでした。地方の放送局ではもう合併しなきゃいけないという話があるとか、ないとかということも耳にしました。

民放は経済的に非常に揺さぶられているという状況です。それでは民放のローカル局はどうやって生きていくのか、核として何を掲げ、地域の中で放送局として立っていくのかということが一番大事なはずなんです、リーマンショック以降、経済的に揺さぶられたまま、お金のことばかり考えていたような気がしてならないわけです。

私は一番抜け落ちてきたのが「報道」ではなかったかと思っています。

恐らくこれには異論があるのではないかと。根っこのところで「テレビって、今どうなっているの」というところをセルフドキュメントというか、自分たちのカメラを自分たちに向ける仕事をしながら、現実をきっちり輪切りにして、これを素材にして放送する。ハダカになってお見せして、さあ東海テレビって、ハダカになるとこんな会社なんですよ、こんな報道の仕方になっているんですよ。皆さんどうぞ見てください。そして地域の中でこの放送局を大事にしてくれますかと問いたい。今や、夢のごときテレビ局像というのはすでに存在なくて、花のテレビ局という時代は過去のものとなり、就職希望者が10年前に比べると10分の1ぐらいしかいないという時代に入っているのが現実です。

ところで私の中では、テレビ局というのは報道が一番大事じゃないのかと（思っています）。反対の方いらっしゃいますか。いやテレビは報道なんかじゃあねえよと。

（出席者から）「反対はしません。でもそれ（報道）だけじゃない」の声。

テレビでは（私は）報道が一番大事だと思っていて、報道がなくなったり、報道が弱くなったりすると、それは刀を持たないサムライになることと同じだと思っ
ているんです。

すでに刀がないことがばれているよ。あるいは刀がある幻想をいったん捨てたところから、再スタートを切らないとダメなんじゃないのか。もしかしたら刀がないことを自覚したくないテレビマンが多いのではないのでしょうか。

ところがどっこい、実はこれ（「さよならテレビ」）を出せるという刀を東海テレビは持っているんです。ハダカの人間に斬りつける人間はいない、そういう覚悟で出したというのが実際に、これがご質問への答え、放送できた理由なんです。すごく回ったでしょう。ぐるぐるぐると（笑い）。

<企画は「ヤクザと憲法」を制作した土方ディレクター>

ここで話を戻しますと、「さよならテレビ」の企画書は^{ひじかた こうじ}土方宏史ディレクター（当時 40 歳）から出てきて、テレビ局は今どうなっているのかといった内容でした。報道に来て 8 年ぐらいになる土方氏は、これまでに大阪の「二代目東組二代目清勇会」に密着し、その日常を描いた「ヤクザと憲法」のほか、高校を中退した球児たちに再び野球と勉強の場を提供する NPO 法人の理事長を追った「ホームレス理事長～退学球児再生計画」などを制作しています。いずれも映画化しました。陽気で突破力がある制作者です。

ところで私たちのドキュメンタリーの作り方は、先のことはあまり考えないで取材に入ります。シノプシスはないんです。企画書は作るけれど、取材に入ってみないとその先が分からない。イベントがあるから取材に行くのではなくて、予定がない日に取材に行くということを繰り返しながら日常に入り込んでいく。ある日、集まった素材を見て、組み立ててみると、ああこういうものになっているんだというような作り方をしてきました。

土方ディレクターが制作した「さよならテレビ」の場合、取材が長期にわたり、大変でした。大体 40 分テープが 400 本ぐらい回っていたのではないかと思います。彼が制作部にいた時代にはずっと企画書通りのものを作るという訓練をしていたそうです。ところがそこから解き放たれて、カメラマンと VE（Video Engineer）とドライバーと、毎日何が撮れるか分からないという状態の中で取材をくり広げた結果、最終的にできあがった番組というのが、えも言われぬものになるということを知り始めるのです。そして 3 本目としてヤクザの組事務所に入って取材した手法と同じ形で、東海テレビの中に入って撮り上げたものが今回の「さよならテレビ」でした。

<第一稿（粗編集）の映像を見て スタッフが泣く>

第一稿（粗編集段階）を作ったとき、2時間10分ぐらいになっていました。その中に記者歴2年の派遣社員（24歳）が地下アイドルのところで、オタ芸をやっていたり、記者歴25年の契約社員（49歳）はメディア論オタクであったりということが分かる。そんな対極にあるようなシーンがありました。

作品が完成するまでに行われる何回かのプレビューには、プロデューサー、ディレクター、編集者、効果マン、カメラマン、VE、そしてタイムキーパーも参加します。タイムキーパーは、一般視聴者の目線に近い番組評をくれるので、必ずプレビューに立ち会ってもらっています。

第一稿を見終わったときに、（スタッフは）みんな泣いていました。身につまされたというか、ここまでハダカになる必要はないんじゃないか、自分たちも含めて、このあと何が起こるか分からないことに震え、泣いたんですね。それでどうしようって、モニター室で語り始めるんです。

やっぱり、セルフドキュメントやるべきでなかったという感じがただよってしまうんですが、いや、これはテレビだけの問題じゃないぞ、日本の社会の縮図がここに見事に描かれているんじゃないか。そのことにやっぱり気づかなければ、ただの露悪趣味で終わるよ。しかしそうではないものに見えているものがあるんだから、そこを第二稿でもう少し練り込もうよ、というようなことを話し合いました。

日本の社会は、あらゆることを偽装したり、隠蔽したり、言い換えたり、改ざんしたり、そういう社会になっている。知らないうちに、この社会は劣化しているのではないかと思うんです。社会の劣化はサービス業の末端に表れると思っています。喫茶店で水を出すときに、そっと出せないお店が増えたでしょう。ウェイター、ウェイトレスが客の前に音を立てて器を出す。その時は、えーと、一瞬思った時代が10年ぐらい前のことで、それ以降、無作法にやられても、それをごく普通に受けとめられる自分にだんだんなってしまふ。そういう社会になってきました。

その同じサービス業の末端の一つがテレビであって、問題なのは、今一番たたかれる対象であるということなんです。

私たち、特に地上波という場所で働く自分たちは、どうあるべきか、どうしたいのかということ、一から考え直してみるきっかけにしたいと思って「さよならテレビ」という番組を構築しました

会社の中では未だに、なんというか、なにか氷が溶けていない状態の中で、今日まで来ているんですが、放送人として先輩である皆さん方はこれをどういう風にご覧になったのかということをお聞かせいただければと思います。

司会 言ってみれば、阿武野さんはテレビに対するラブレターとして、あの番組を作ったんじゃないかという気がしています。それは違うのかもしれませんが、ナレーショ

ンを入れないというのは、作る前から考えておられたわけですか。

<分かりやすさが最上級のテレビ表現ではない>

阿武野プロデューサー

土方ディレクターはナレーション原稿を書くのがあまり得意じゃないんです。得意でないものをやる必要はなくて、絵をつなぐのはとても上手です。物語をきちんと構築していく力もあって、ナレーションのないほうが映像世界の中に気持ちを入れやすい、つまり集中できますよね。番組を見て何が言いたいのか分からないという人がよくいますが、それは見た人が考えることです。こちら側（作る側）はこうなんだという感じでボールを投げられるけども、ボールにどういう色がついているのか、ちゃんと言ってくれないと、キャッチできないよという人には、不向きな番組作りをやっているのかもしれない。分かりやすいということが最上級のテレビ表現だとは思っていない。分かりやすい番組も必要だけれど、10年後ぐらいに、あれって、そういう意味だったのかと思うことがあってもいいかなと思いつながら作っているんで、スーパー、ナレーションもなるべく少なくするというのが私たちの制作姿勢ですね。

出席者 アメリカのドキュメンタリー映画の第一人者であるフレディック・ワイズマンの作品を思い出しながら見ていましたが、ワイズマン的にナレーションも、スーパーもなしで、見る人に判断させるというドキュメンタリーだったと思います。テーマのあるものではなく、現実という風呂敷を広げて、どうだとする人に問いかけている作品です。私は報道の現場に長いこといたので、この作品のどの部分について、何が悪いのか、なぜそんなに問題になったのか、ちょっと分かりませんでした。

出席者 この作品は多分、阿武野さんがいなければできていなかったでしょうね。阿武野さんという存在があったからこそ成立できた。ほかのディレクターが企画書を出して企画が採用されたとしても、放送にまで至らなかったと思います。もう一つ思ったのは、東海テレビの報道を描いている割には、報道の本体のところに踏み込んでいなくて、すべて外にいる周辺、派遣の人ばかりで東海テレビの社員の記者がいらない。一人いますがキャスターであって、記者じゃないですね。その辺についてどう思われますか。

<番組の軸に“派遣スタッフと社員”の問題>

阿武野プロデューサー

確かにご指摘通り、なんで社員の記者が出てこないんだという批判は、社内でもありました。私はむしろ、そこに何か本質的な意味があると思ったんです。

今のテレビの構造が、こういう風になっているということ、つまり社員の記者が奮闘している的なものを見せるのが本意でなくて、如何に人件費を削減するかという方向にかじを切ったときから、こうなることは目に見えていたはずですよ。3月で契約が切れるんですよと言っていた派遣社員の新人記者は、東海テレビの後、テレビ大阪の報道部に派遣され頑張っています。彼はテレビ愛知で2年、東海テレビで1年、そしてテレビ大阪と4年で3社を経験しています。派遣社員や契約の外部スタッフの中に一番大きな矛盾が出てくるのは必然ではないでしょうか。

その辺りを最初から映し撮ろうと思っていたわけではないのですが、最終的に社員の記者の素材は捨てて（撮影している素材もあったが）、構成上の軸として派遣スタッフの先輩と後輩を据えました。

それから取材には応えないだろうと思っていた「セシウムさん事件」の渦中にあつた男性アナウンサーが、一体何をかかえて、この8年間を過ごしてきたんだろうかということに触れようと思いました。

私は随分いろんなところで「セシウムさん事件」のスピンオフ（続編）の番組を作れないかと言われてきましたが、なかなかできませんでした。

【注】「セシウムさん事件」（放送事故）

東日本大震災が起きた2011年の8月4日に東海テレビのワイド番組「ぴーかんテレビ」（通販コーナー）で岩手県産のお米を紹介中、「怪しいお米」「セシウムさん」などと不適切な表示（テロップ1枚）が誤って放送された。

そして、作るとしたらこういう形になるんだろうなと思っていました。

「セシウムさん事件」とは、一体何だったのかということを考え続けて、結果的にそれに直接こたえる番組でなくなっていたとしても、そこを思い続ける人々がいるか、いないかということと、あいまいにしたままで、いいのか悪いのかの思いがあったんですね。

「さよならテレビ」の場合、自分たちの気持ちの中に毎年一回、「放送倫理を考える日」というのがあるんです。明らかに形骸化していくと思うドキュメンタリースタッフがいたわけです。型にはまっていく、その型さえやっていたらなんとなく許される気になっちゃうという。

社長は毎年、8月4日（不適切なテロップが送出された日）の前に必ず岩手に行くんです。去年も行きましたし、今年も行くと思います。去年岩手の皆さんが愛知に対する感射の夕べを開くと言ったときに、社長が呼ばれたんですね。なぜなら、東海テレビは誠実な放送局だと岩手の人々が感じてくれたからだと思います。

東海テレビの社員食堂のご飯はずっと岩手県産米で、岩手の復興イベントがあれば積極的に撮りに行くとか、岩手に関連することはなるべく取り上げるようにしてきました。

それでも、社長の思いとはちょっと別のところで、社員の意識は形骸化していくわけです。そのときに、福島アナウンサーがかかえ続けてきた問題、テレビマンとして、キャスターとしてこんな際（きわ）を歩かせてきたんだという痛みを知らせ、共有するというのが、大事なメッセージだと思うんです。

【注】福島アナウンサーは、不適切なテロップが送出されたとき、スタジオにいて、何度もお詫びのアナウンスをした。

「さよならテレビ」の番組の中でも当時の画面が紹介されている。

経営者でもないのにとんでもないことを言いますが、やっぱり企業は永続性というのが大事なわけで、目先のことと金のことばかりで、如何に後輩に渡していくかということも考えられない人間は、年とっても尊敬されないでしょう。

そこを上手にどうやって渡していけるかということを考えるミッションを「さよならテレビ」の中に仕込んだ（つもりです）。

＜なぜ“さよなら”なのか 開局 60年 ゼロに戻って「テレビ」について再考＞

なんで「さよならテレビ」なんだよ、と問われれば、こういうことなんです。

来生^{きすぎ} えつこ作詞、来生^{きすぎ} たかお作曲。薬師丸ひろ子が歌っていますが、歌い出しに

「さよならは別れの言葉じゃなくて、再び遭うまでの遠い約束」

という歌詞があります（歌おうと思ったんですが-----笑い）。

「さよなら」というのは、「そんなならば」という意味があるでしょうし、一度ちゃんとお別れしないと、ちゃんと次の出会いができないんじゃないの（と思います）。

そして東海テレビ 60年、タイトルに「開局 60周年」と付けた理由は、プロデューサーとして、ゼロに戻るという意味を明確にするためなんです。

私は還暦、ゼロに戻る、戻ったときに何を出せるかということを中心に刻印して、恐らく 3～4 か月と思ったけれど、実際には 1 年以上、冷たい風を浴びるのかなと思いつつも、出して（放送して）よかったと言えるときが来るまで、この番組を持ち続けようかな（と思っている）。

次なる展開というのを忘れないで、これは（映画化）、12 弾に出来るか、13 弾に出来るか分かりません。「テレビと私たち」について再度、考えてもらう。

私たちは地域に生きるテレビ局であり、地域の人たちが誇りとするものをドキュ

メンタリーとして出し続けることによって、ジャーナリズムの刀が、ドキュメンタリーの中にずっと仕舞ってあるということだけは忘れてもらっては困るんです。ニュースがガタガタになれば、ドキュメンタリーはそのとき支えているぞ。ドキュメンタリーがガタガタになったときには、ニュースが懸命に支えるぞというふうにお互いが報道の中の両輪として、もう一回位置づけ直せばいい。ずっとすばらし東海テレビ報道局でありたいと思うんです。

【注】 「さよならテレビ」が放送された直後、寄せられた反響の中に“会社の中にガバナンスが利いていないのではないか”という声があったが、東海テレビ社長は放送から4か月後に「さよならテレビ」に触れて、側近にこう語ったという。「現場の番組にガバナンスを利かせないことが最も重要なガバナンスである」。

司会 この席には経営者の方というか、社長さんが何人かいらっしゃいます。ご意見ありませんか。

<番組見た二人の元社長“いいんじゃないか”“恥ずかしいと思う必要ない”>

出席者 どうもありがとうございます。僕は阿武野さんの作品、光市の母子殺害事件を描いた「光と影」、「裁判官のお弁当」などを見てきました。今回のドキュメンタリー作品の場合、(東海テレビの社内で)経営者の中に何かうしろめたいという気持ちになった方がいたということでしたが、それはおかしいなという気がしました。これまで東海テレビのドキュメンタリーが誠実に制作されてきた中で、一つは開局60年を機にゼロに戻るという話がありました。集大成の思いでテレビを一度見直してみようと、自分たちが60数年やってきたことを、正直に見つめてみようという発想からこの番組が生まれたのでしょうか。そして、今までの実績と共に裏打ちされた東海テレビのドキュメンタリーだからこそ、新聞、雑誌、インターネットなど多くのメディアから注目を集めているのです。そういう意味では、今までのように番組を誠実に作り続けるということが重要なんだと思いました。それともう一つは、私も現役を離れてずいぶん日が経つんですが、テレビのおかれている状況というのは、先ほど触れられた日本の社会現象と密接につながっていて、ある種の縮図がここにある。労働改革、時間外の問題ですね。特にわが社でも報道の時間外というのは、我々が現場にいる頃から常にそこが問題になっていました。どうして時間外を減らすか、ここにおられる皆さんは、その立場におられる方ですから、報道の時間外をどうすれば絞り込めるか必死になっていたと思いま

す。それにみんな抵抗してきた人たちでもあるんです。

それに加えて、社員と制作会社から派遣されている外部制作者間の問題があります。

テレビ局の我々社員の収入が、世間から見れば高額であることは派遣のスタッフもうすうす分かっている。制作会社からの外部社員はもの作りをしたくてやってきたが、なかなか(仕事が)うまくいかない。そして給料など待遇面での厳しい条件のもとでよくやっていると思います。

片や、放送局の社員は必死になって番組を作っていて、それなりに給料はもらっているわけですね。外部制作者と社員の間の格差はいぜんとして解消されていません。そして放送倫理に関連した問題があって、我々もやらせ事件を起こしましたが、テレビは常に真実を伝えていくものということに対して(テレビは)面白ければいいんじゃないというところから、報道と演出の問題についてはいろいろ議論を重ねてきました。しかも形骸化して行って、やっぱり面白ければいいんじゃないかという風になっていく。こういったことは我々のときからずっと続いているんです。ただ今回の番組からは、地上波テレビそのものの現況がネットの出現などでやはり変わってきているということが見えてきました。制作会社との問題などはもっと深刻になってきているだろうし、時間外の問題も、今テレビの制作や報道の現場はなかなか仕事がしづらい状況にあると聞いています。そんな中でもう一度、テレビとはどうあるべきかをみんなで考えようというのが、今日見た「さよならテレビ」だったのではないかな。

東海テレビの社長は、恥ずかしいなどと思う必要は全くないのです。

阿武野プロデューサー

実は経営者に対しては後ろめたい気持ちになってほしいという部分もあるんです。例えば報道に、圧倒的に優秀な人材を投入しようとせずに、前例踏襲のような人事異動をするのでなくて、東海テレビがこれから地域で生きていくために必要とされる存在となるためにはどうすればいいか、ということは今まさに考えるときなんだとのメッセージを受け取ってほしい。従ってセルフドキュメントですっぽ抜かれたというふうに思ってくれるぐらいの感じがちょっとあってもいいかなと思うんです。

私もテレビはビックリ箱だと思っていて、真面目なだけではちっとも面白くない。いかがわしさもあったり、良質なエロもあったり、何かいろんなものがごった煮になったテレビという箱であっていいと思ってきたんです。その活力が失われているのは、一体なぜなのか。

実は人事政策そのものが今後のテレビ局のあり様というのを大きく左右してきている。一体どういう志願者が来ているかということを見ないといけないん

ですが、そういうふうに見えないというのも大きな問題でしょう。
経営者にも頑張ってもらいたいと思っています。

出席者 私も、西村さんと同じように苦労した時代に(社長を)やっておりました。
この番組(「さよならテレビ」)をずっと見ていて、もし私が現役の社長であったとして、これをどう見たらどうか。すごく単純明快なんです。“いいんじゃないか。そのくらいの度胸を持たないとやれんぞ”というのが実感なんです。苦労されているのが----。どうやら社長さんは随分いろいろよくお分かりになっているらしいんだけど、やっぱり社長の思いだけではあかんわけで、その思いが社内で、つかあになれるような、そういう発想を持たないとだめなんだろうなと思いました。
きっと私は(現場で聞かれたら)“いいんじゃないの”とひと言で終わったんじゃないか。多分それは、思い上がりかもしれませんが、その頃私と一緒にやっていた社員たちは同じように感じたんじゃないか。
放送というのは我々がやっていたころから比べると、さらに厳しい状態になっている。結局は、伝達手段の多様化の中でもがいているだけなんですよ。
やっぱりもう一回、放送マンというのは決定的にアナログにおちいるべきだと思うんです。
放送局は、放送するための番組を作っていればいいということではない。放送局は脱放送局でないといけない。社員が、放送局の人間でございと、番組を作っているだけではアカンという時代にますますなっているのではないか。
でも先ほどの西村さんが抱えておられた問題はずっとそのままなんです、やっぱり今でもそう思っています。
放送局は地域免許ですから、NHKも含めて、まさに(阿武野さんが)おっしゃったように地域に何が出来るのか一番大事なことです。そこからもう一回掘り起こした活動の中から出来上がった成果の一つの表現手段が放送なんだというくらいに思わないといかんのだろう。この番組を見てそう思いました。
いろんなファクトがありましたからびっくりしました。そういう意味では大変、勉強になりました。
まだ放送の端のほうにしがみつきながら、いろんなことを言いたい気持ちでありますので勇気づけられたと思っています。

司会 阿武野さんには まだまだお聞きしたいことがありますが、丁度5時になりましたので、ここで散会することにします。本日はありがとうございました。

以上